

ポール・ブロカの形質人類学の前提

— 政治 (性) の拒否と変移説の否定¹⁾ —

アルノ・ナンタ*

19 世紀は多くの点で、20 世紀の諸問題やイデオロギーの母体をなした。特に、列強だった西欧諸国 (フランス・ドイツ・イギリス・ベルギー・オランダ)、ならびにアメリカ合衆国や、帝政ロシアや、それから日本においては、国民国家の形成、民族や国民といったあらゆる共同体の生物学化、植民地主義を導いた列強間の競争という三点が注目されよう。「西洋」と「東洋」などという区別は全く意味をなさず、むしろ支配者側の世界と被支配者側の世界との区別のみが重要だった時代である。そこでは、一方では、近代国民アイデンティティの形成に幅広く貢献し、他方では、植民地主義のため支配された人々を研究対象とした上で、人種分類によって有色人種の劣等性と白色人種の優越性を強調した〈人類諸科学〉が、19 世紀の世界秩序を正当化する上で非常に重要な役割を果たし²⁾、米英仏から日本に至るまで、帝国主義の競争に参加した国なら常に必要となった学問領域であった。

本稿では、ポール・ブロカ Paul Broca (1824-1880) を中心に 1859 年に確立されたフランスの形質人類学の歴史を顧みて、前述の文脈に関する二つの根本的な問題について考えてみたい。ブロカの人類学は周知の通り、フランス国民の統合を図りつつ、世界の各人種間に固定したヒエラルキーが存在することを提示したものである。では、ブロカ本人が、政治一般について、そして翻って、人種を対象とした自身の研究の政治性についていかに認識していたのだろうか。これが最初の問いである。次に、人類の単一性について 19 世紀の人類学界に反響を巻き起こした大論争である単一起源論 (Monogenism)/ 多起源論 (Polygenism) 論争の中であって、ブロカはどちらの立場を支持したのか、その根拠は何であったのか、という問題である。20 世紀後半では、19 世紀の単一論は、特にヨーロッパ中心主義的な「進化主義 (Evolutionism)」かつ多様性を否定する言説として厳しく批判されるが、しかし当時は、こと

* Arnaud Nanta フランス国立科学研究センター (CNRS) 一級研究員 (准教授) Centre de recherches sur le Japon nanta@ehess.fr/arnaudnanta@hotmail.com

に多起源論に対して進歩的な立場だったのである。そこで本稿では、19世紀という進歩主義的・唯物論的な文脈におけるブロカの位置や言説を考えてみたい。「人類学を吃肉した人」³⁾ ポール・ブロカは早い段階から共和政を支持しており、政治上は進歩派でありながら、生物学に関しては進化論を否定した。こうした一見矛盾した事実についての評価も、以上の背景抜きでは不可能だと思われる。

さて、本論にはいるための予備的考察として、まずフランスにおける人類学史の趨勢を簡潔にまとめておこう。

19世紀の形質人類学については、これまで多角的に研究されてきたが、これらの歴史研究は概ね二つの範疇に属している。一方には学問の創設以来蓄積されてきた人類学者らによる内的（インターナル）研究史があり、もう一方においては大体1980年代頃から始まる専門の歴史学者らによる外的（エクスターナル）な歴史研究である⁴⁾。歴史記述のこの二つの系統は、目的も視点も、そして方法論も大幅に異なる。本稿と関係するものでは、ブロカやアンリ・ヴァルワ Henri V. Vallois (1889-1981) またはドイツのルドルフ・ウィルヒョー Rudolf Virchow (1821-1902) のような、(どのような評価であれ) 近代人類学の制度化や安定化の過程において非常に重要な役割を果たしてきた形質人類学者らに対して、歴史学者らと人類学者らとの間で常に論争が続いている。日本ほどではないにしろ、フランスでも1860年代まで遡った内的な研究が多くの研究書や論文でなされてきた。同時に、梗概を述べれば、1952年にクロード・レヴィ＝ストロースがユネスコに依頼されて執筆した著作において形質人類学それ自体を厳しく批判してから⁵⁾、形質人類学が人類学史上あたかも存在しなかったもののように形質人類学を除いた〈人類学〉が内的人類学史の主体となってきている。この動きは1966年刊行の『人類学の歴史』(*Histoire de l'anthropologie*)⁶⁾ですでに窺えた問題であり、1980年代に遺伝学者や生物学者による形質人類学批判の著作が何冊か出版されたのち⁷⁾、1990年代に入りその本質上非常に規範的な人類学(史)辞典が数冊出版された頃には、形質人類学に関する基本的な記述は、完全削除されるか、さもなくば矮小化されるような状態にまでなっていた。これは、例えば1991年刊行(2000年に再版)の『民族学・人類学辞典』(*Dictionnaire de l'ethnologie et de l'anthropologie*)では、現在の人類学者らが規範的な視点をもって描写したい人類学像しか記載されず、1997年刊行の『人類学者辞典』(*Dictionnaire des anthropologues*)では形質人類学者らについて少々の記述があったものの⁸⁾、2004年にラウトレッジ Routledge 社から出版された改訂英訳⁹⁾ではブロカを初めとする形質人類学に関する項目が全て削除される結果となった。ここに、内的研究史の〈限界〉と規範的な意図がよく窺えると言えよう。

また、1980年半ば頃から、近代国民国家それ自体を研究対象としたエリック・ホブズボームやベネディクト・アンダーソンの研究¹⁰⁾から影響を受けつつ、1971年刊行のレオン・ポリ

アコフによる先駆的な歴史研究『アーリア神話』¹¹⁾と同じ路線上で、19世紀の形質人類学や先史研究を専門とするクロード・ブランケルト Claude Blanckaert のような歴史学者らが研究し始めた¹²⁾。あるいは人類学それ自体を疑問視して、パトリック・トルト Patrick Tort やフランシス・アフェルガン Francis Affergan のような哲学者らも生物学や人類学一般の検討を開始した¹³⁾。彼らは、アメリカの、ことにスティーヴン・J・ゲールドを中心にした内的・外的の両立場を併せたような（稀ではある）研究者¹⁴⁾の影響も受けてはいるが、フランスの歴史学者は、歴史学者として実際に起こったあらゆる事実を検討し理解しようとするため、その一環として規範的な記述を完全に否定し、科学史という営みを、科学者らの活動全般を研究することだと見なしている。ダーウィンの評価を中心にトルトと一緒に論争を交わしたブランケルトは特に、1990年代からフランスにおける形質人類学と人文科学の歴史研究をリードしてきた主要な歴史学者である。また、彼の周りにフランスやヨーロッパ各国の形質人類学史を研究する学者らのグループが形成されてきた¹⁵⁾。2001年出版の『人類学の政治——フランスにおける言説と実践 1860-1940年』(*Les politiques de l'anthropologie: discours et pratiques en France (1860-1940)*)¹⁶⁾を編集して、ようやく歴史学者によるフランス人類学の総合的歴史書が刊行された。あるいは1980年代末から、歴史学者らの動きを配慮して、人類学者らと歴史学者らとの共同研究も僅かながら進められるようになった。パリ人類学会の会報において1989年にフランス人類学史について特集が組まれたが、これよりも1986年1月に創刊された人類学史・考古学史をテーマとする雑誌『グラディヴァ』(*Gradhiva*)が現在でも刊行中のためより重要であろう。しかしながら、人類学者らも参加する『グラディヴァ』でさえ内的・外的な記述との間の相違が依然として存在している。

以上の先行研究、特にブランケルトによる膨大な数の論文に依拠しながら、本論ではまず、ブロカ本人から見た自らの〈客観的な〉人体測定学の前提と論理、主にその政治性の拒否と政治派閥に対する独立性というブロカの持論を紹介する。またブロカは、植民地主義を批判する一方で、植民地経験の長期化とアフリカ人との接触の増加にもかかわらず、二世代三世代経っても人種が変わらないことがわかると、単一起源説は宗教じみた非科学的な説明だとみなして、単一起源論／多起源論の論争では多起源論を支持していくことになるが、こうした彼の思考の変遷過程を我々は次に追うことにする。最後に、ブロカが1880年に逝去するやいなや勃発する形質人類学への批判を精査して、一般的に認められる形質人類学に対する当時の「コンセンサス」について本稿で考察することにする。

1. フランスにおける人類学の制度化とブロカによる政治（性）の拒否

第二帝政末期（1852-1870）から第三共和政（1870-1940）初期という文脈において、研究対象である人骨、それに政治派閥に対する独立、という二つの観点から、ブロカは自身の人類学研究の中立性・科学性を強調し正当化していった。非常に典型的といえるこの規範的な主張を分析することによって初めて、彼の人類学を理解することができると思われる。まずパリ人類学会の創立に戻ってみよう。ブロカによる具体的な結論の限界や政治性は、ポリアコフやゲールド、あるいは渡辺公三¹⁷⁾らが既に紹介しているため、前述の通り、むしろブロカの人類学の前提について論を集中させたい。

ポール・ブロカは周知の通り、元々外科医かつ組織学者であり（ウィルヒョーや清野謙次（1885-1955）など、組織学の分野から研究し始めた形質人類学者が多い）、1849年に医学博士となつて、翌年に創立されるパリ人類学会の企画書を執筆している1858年には、医学界においてすでに知名度の高い研究者だったのである。このように、1859年から亡くなる1880年までブロカは、平行して二つのキャリアを進めていく。パリ人類学会の発起人かつ中心的な人類学者でありながら、同時にパリ大学医学部で教授として授業を行い、数回もフランス外科学会の会長を務めた。第二帝政末期の集会・結社に対する取り締まりが厳しかった状況で、パリ人類学会は、1859年に警視庁に許可され、次に1861年によくフランス文部省によって公式的に認証されたのち、1864年には皇帝の勅令をもって「公益施設」として認められるようになった。すなわち、ブロカによって再構築された、人類学という新しい研究分野が、たった5年間で正統性を得ることに成功できたのである。東京人類学会が坪井正五郎（1863-1913）によって創設された1884年よりもたった20年前の出来事であり¹⁸⁾、医学における相違が確かに大きいとはいえ、近代形質人類学の制度化に関しては日本とフランスの間でさほどの差が認められない。

ブロカはあまりにも数多くの職務や栄誉を重ねた人物だけに、全てを紹介するだけでも一本の論文が必要となるだろうが、彼の言葉を借りれば、概ね「医学と人類学とに己の生涯を振り分けてきた」¹⁹⁾ と言えよう。彼の発言は非常に重要である。というのも、ブロカは、方法論上統一された基盤に従って医学と人類学を接近させ、しかも人類学研究それ自体に科学的保証を付与することによって仲間の医者らを動員することに成功できたのである（パリ人類学会の初期には、会員の8割が医者であった）。さらに、こうしたブロカの戦略は、1860-1870年代に近代人類学を解剖学の一部へと変貌させていくことになり、彼をして、「医学も人類学も、人間およびその構造や機能を研究する学問である。両学問とも、生理学と解剖学において共通な基盤を持っている」²⁰⁾ と力説せしめたほどであった。とはいえブロカも、医学が個人を調査してその苦痛を和らげようと努めるのに対し、人類学はむしろ個人と集団との相互関係を研究すると

いう、両学問間の相違をよく意識していた。それでも、上記のような医学と人類学との連動と人類学界におけるブロカ本人の不動の権威とが、いくつかの帰結を導くことになった。第一に、19世紀には批判的に使われていた言葉である「体系」(systèmes)すなわち、ことに神学の教義から解放され、生理学と解剖学を前面に持ち出すことによって初めて可能となった近代医学革命と同様に、人類学も「最も確実な事実」つまり解剖学的なデータに傾斜していった。第二に、従来曖昧かつ多義的であった「人種 (Race)」という語彙が、非常に厳密に定義されていくことによって、(自然史系や探検日記系の) 従来民族＝人類学が正真正銘の「人種の科学 (la science des races)」へと変貌していった。しかもこの二つの変化が、学問の政治性と他民族に対する先入観を拒否する名分で行われる。

ところが実は、ポリアコフやグールドなどが以前から立証したように、形質人類学はその初期から、頭蓋骨の容量や形をもって黒人らの人種的劣等性を断言したり、女性らを社会空間の外側へ排除したりするなど、科学と関係のない様々な方向へと転用されていたのである。「科学的研究」を邁進させるために、パリ人類学会の会則において、この学問の目的が厳密に定義されており、なかんずく「各人種の研究」と「我が国民の起源」という二つの課題が重視されていた。ブロカはこの進め方を通じて、「人間」をより細かく理解しようとして、人間固有の時間性と空間性である歴史と文化を廃棄していったのである。地球に分布する各人種を純粋に解剖学的な観点から検討するためには、特殊な方法と道具が必要となってくる。そのような19世紀の形質人類学の知的な論理と方法（頭蓋測定学や、ベルティヨン Louis-Adolphe Bertillon (1821-1883)²¹⁾ とともにブロカが発案した統計) ないしその実践のための道具（測定器）は全てブロカに負っている。こうした方法を通じて、地球の各人種が持つ体質の特徴を、従来は理解されなかった一種の「記号」として扱って一つの組織の中に配置することによって初めて人間を理解することが可能となるとブロカは言う。次に、平均値という方法によって立証された各人種間の厳然とした差異という観点、かつ、アルテュール・ド・ゴビノー伯爵 Arthur de Gobineau (1816-1882) など1850年代の論者らによって再び主張された人種不平等論という理論を通じて、人類の中に存在する各タイプ（型式）つまり各人種の心理上・文化上の成果を評価した上で、階層的な生命連鎖の中へと配置・分類することが可能となる。こうすれば、一種の偏狭的な決定論に従いつつ、頭蓋測定学と形態学を使用することによって「単純な現象から複雑な現象へ、既知から未知へ、物質的・有機的な現象から非物質的な現象へ移ることが可能になる」²²⁾ のである。生物不変説を支持する立場に立ちながら、観察され測定されたあらゆる人体的特徴に関して「自然が各人種には超えられない限界を付与している」と見なしていたがために、ブロカは、身体上の形質を検討するとともに「各人種が人類の連鎖においてどこに位置するかを確定するというのは当然のことである」と説明した。「脳の大きさ以上に頭蓋計測学の最も陳腐でかつ誤用された二つの計測値は〔カンペールの〕顔面角と頭蓋指数である

」²³⁾ とグールドが既述しているように、ブロカの頭蓋骨学は非常に広く使用されていく。その結果、民族学の従来目的だった他者に関する研究が、ブロカを通じて人種の確定へと変貌し、世界の秩序をより高度に合理化するための手段となっていくのである。ブロカが支持した生物不変説について第二節で後述するとして、まず彼がどの前提に基づいて自らの研究を正当化したかという課題に戻ろう。

21世紀の現在になって、19世紀の科学の諸結論の背後にあった先入観が把握しやすくなったのかもしれない。つまり、当時是一种の社会的な目的と、事前既決の漠然とした結論とによって支配された「何かを立証したがる意志」が、実は複雑である自然現象を検討する態度に勝っていた²⁴⁾。ところが、ブロカとその同時代の研究者らは、そこに、科学における政治的偏見の侵入などを見破ることはなかった。人類の種々のタイプ間の不平等と（19世紀に固有な進歩崇拝の中心的な考え方であった）数字の万能さとが、現在から見れば大変酷い自己満足論に見えるのだが、これらはまさしく彼らの時代における人体測定学的パラダイムの中心部を占める要素だったのである。つまり、19世紀のブロカらは人種の研究において、科学が政治性に満ちた言説へと逸脱してしまったような営為と見なしていなかった。パリの国立自然史博物館人類学講座の主任であり、思想家ピエール・アンドレ・タギエフ²⁵⁾が「非人種主義的な例外」だと見なすアルマン・ド・カトルファージュ Armand de Quatrefages (1810-1892) でさえ、人種の不平等を科学的に証明された事実として認めていた。

次に、医学ではそうであったように、人類学の進歩が何よりも独立性によるものとブロカが考え、この見解は人類学会の初期に、協力者らの間で広く共有されていた。ブロカも、ブロカの没後、彼を厳しく批判するポール・トピナール Paul Topinard (1830-1911) も²⁶⁾、科学の「応用」は科学に属しない（つまり非科学的である）ものであると何度も繰り返し主張するなど、応用科学に対して二人とも慎重だったのである²⁷⁾。「科学活動」と「応用科学」との間のこうした分離は、先述した解剖学の果たすべき中心的役割と並んで、〈科学の独立性〉の二つ目の柱をなしていた。ブロカ時代の論文では、人類学者らが、政治性ないしイデオロギー性を全く持たないという科学のイメージを強く主張していたのだ²⁸⁾。しかしながら、ブロカ本人も強く主張した²⁹⁾、人類学は「独立した」学問であり「最も確実な事実」に基づく学問であるべきだという捉え方は、我々にとって一つの大きな問題を露呈してしまう。一方において、人類学者らの言説や意志があり、他方には、彼らの具体的な活動や事実上の科学応用、との間のギャップである。

1860-1870年代に、イデオロギーに対して中立性を保つことと、政治性が持たないこと、という二つの理論に基づいて、ブロカがどのように自らの「人種の科学=人類学」を構築していったかを見てみよう。当時であって、パリ人類学会の会報に、人体測定学的な研究と政治的な活動との直接的な関係についての論文はほとんどなく、あたかも削除されてしまったかのよ

うな印象を受ける。トピナールの言葉を借りれば、そこに「悪意ある影響」から解放された、抽象的観念まで昇り得る科学が存在していたのである。こうして、ブロカ時代には不思議なほど、社会問題やフランスのいわゆる「文明的使命」に関する言及がほとんど見受けられない。ポール・ブロカからすれば³⁰⁾、整合性を持たなかった従来の民族誌や神話学、それに言語学や文明史といった学問は、解剖学が持つ実証性を崩壊させるものに他ならない。換言すれば、文化または言語を研究する古典的な民族誌が、偏見と価値判断に満ちた主観的で偏った学問に過ぎなかったのだ。近代人類学とはまさしく物理学 (Physics) を模範に再考されなければならなかった。結局のところ、いくら総合的な学問領域として謳われたパリ人類学会であっても、医者らが会員の過半数を占めている以上、言語学者や歴史学者や文学者に対して冷淡な雰囲気があったのである。特に、カトルフェージュやその助手であり彼の後任となるエルネスト・アミー Ernest Hamy (1842-1908) など自然史博物館の人類学者らと 1859 年に創立されたライバル学会である民族誌学会 (Société d'ethnographie) の研究者らが主張していた、人間の心理的・社会的営みの研究を、ブロカは全く無意味なものとして蔑ろにしていた。アミーは、ブロカから距離を置き、植民地侵略が加速していく最中にジュール・フェリー Jules Ferry 大臣の支援と許可を受けて 1880 年に Musée d'Ethnographie du Trocadéro トロカデロ民族誌博物館（現在の人類博物館 Musée de l'Homme）を創立し、その最初の館長となる³¹⁾。こうしてブロカは、社会の研究と「人種の科学」とを対立的に捉えるようになっていく。彼によれば印象論でしかない民族誌という系統は否定され、むしろ重視すべき「人種の科学」は、フランスの民族学者ウィリアム・エドワード William Edwards (1777-1842) の努力によって 1830 年代中に誕生しているが³²⁾、18 世紀末の民族学と比較すれば、エドワードの研究の方が「はるかに上位にある学問」であり「ひたすら科学的な研究」とまで形容できるものだった。また、1839 年にパリで民族学会 Société ethnologique を創立したのは、エドワードだったのである。

現実の社会や政治（性）を意図的に敬遠したブロカは、応用科学と対立する「基礎研究」という理想を重んじていたかのように見える。そこに彼は、まるで一種の戦略に沿って行動していたかのように、「外側の雑音に対して耳を閉ざす」と発言していたのである。彼からすれば、科学の「応用」は常に、未定の将来へ延期されるべきものであると考えつつ、1869 年の論文では³³⁾、植民地政策や奴隷制度廃止という二つの激論に参加することによって 19 世紀初頭の全ての学会が相次いで弱体化してしまったと見ていた。その結果、人類学そのものが国家や一般世論の信用を失ったと言う。それに対応すべく、科学者らは国事に対して関心を持つ義務があるとはいえ、研究室にいる時は「彼らは自分の感情や熱望を抑制し、外部からの雑音に対して耳を閉ざして、真理の厳正な声しか聞こえてこないようにしなければならない。なぜならば、科学とは自らにのみ基づくものでなければならず、政党や派閥の要請に服従してはいけぬからである」³⁴⁾。とはいえ、人類諸科学の安定化という目的だけではこうした路線が説明できない。

他にも、1859年の時点で *anthropologie* という言葉の背後に何らかの「政治的な企み」が潜んでいることをフランス当局が懸念していたという政治的文脈も、制度化・安定化の必要性と並んで、ブロカの選択や立場の原因を理解させるものがある。特に1858年1月14日に起こった皇帝暗殺未遂事件の直後に、同年2月27日に治安維持法 (*Loi de sûreté générale*) が制定され、共和政支持者に対する弾圧が加速する最中に、ブロカの慎重な態度は一層納得のいくものであると言えよう。最後に、第二帝政期における、ブロカと政治(性)との離別を説明する個人的な要素も確認できる。彼は1848年に熱烈に第二共和政を支持したが、同年6月の総選挙の結果(国民議会議員の過半数が王政復古派³⁵⁾)に失望した。オーギュスト・コント Auguste Comte (1798-1857) 系ないし共和政系の唯物論的かつ無神論的な信念が強かったブロカは、第三共和政になると権力へ再接近していったが、最後まで政治(性)に対する不信が続いた。

しかしながら、ブロカの研究の中で一番批判しやすいといえる人種的/人種主義的な結論は措くとしても、彼の幾多の論文で主張されているように、応用科学に対し本当に背を向けたのだろうか。実はそうではない。ブロカが派閥精神に対して警鐘を鳴らしたり、あるいは「純粹」で「独立性」を保った科学を持論としてはいたが、彼の「人種の科学」が、価値と効用の共通領域を通じて、著しく政治的権力つまり国家に影響を及ぼしたのである。以上のような発言でも、ブロカの考えでは、人類を熟知している学問つまり人類学こそが、どの学問よりも政治行動を指導する資格を持っていることになる。言い換えれば、「顧問」のような役割に限定されるのではなく、ブロカと彼の多くの人類学者仲間にとってはむしろ、人類学とは、将来に向けて規範的な提案をすることによって指導的な責務を負うべきものであり、さらに直接に国家権力の行使に参加すべき学問だったのである。経済格差の減少、死刑に関する論争、女性の教育、公衆衛生のような社会問題に関して非常に実用主義的だったブロカは、「政治」を拒否していたというよりも、本当は現在我々の言う政治的策謀や政治家の間の闘争つまりポリティカル・ゲームを嫌悪しつつ、純粹な「科学的研究」の理念を重視していた、と言い改めるべきであろう。科学による冷静な立証こそが、政党や派閥の猛烈さに対抗できるだろうと彼は考えていた。とはいえ、人類学が指導的な責務を負うべきと考えたブロカは、愛国心をもって、専門家として積極的に活動したケースがいくつかある。例えば、徴兵制やより総合的にはフランス国民全体の公衆衛生状態と、各人種をいかに異なる環境に適応させるかという植民地主義関連の問題、という二件の彼の関わりについては、すでに先行研究によって詳細に検討されている³⁶⁾。

だが我々は、人類学の応用を分析するよりもむしろ、ブロカの持論である「科学的研究」の範疇に入る論争について考察したい。彼が人体特徴を最重要視していく前提は、生物不変説を支持していた前提と同じであり、立証不可能な空論を「政治的・宗教的」な言説として敬遠していたということである。エドワードの理論を継承したのも、「もし各人種が永遠に存続する

ものでなければ、民族学など存在しないだろう」³⁷⁾とエドワードが見なしていたからであり、ブロカにとっては、人種が変化するという見解が立証されていないからであった。しかも、ブロカが生物変移説に対して生物不変説を支持したことから、ブロカは単一起源論に対して多起源論を支持していくことになる。

2. ブロカと変移説の問題——多起源論の支持者としてのブロカ

19世紀の人類学者らが起こした大論争と言え、まさしく単一起源論と多起源論を対立させた論争である。まず簡潔にその内容と意味するところを要約しておく。多起源論者らにとっては、人類の間に観察する差異（つまり、白色人種、黒色人種、黄色人種という差異）は、人種（Race）レベルのものではなく、むしろ種（Species）レベルのものである。この仮説に従えば、白色人種と黒色人種は生物学上、違う動物であり、異なる「発祥の地（centres de création）」から生じた違う生命体である。これに対して逆に、単一起源論者らは、劣等ではあっても、黒色人種と黄色人種とが、白色人種と同じ種に属していると考えており、その間に発達レベルの差異つまり人種レベルの違い、あるいはそれと連動した文化と進化におけるレベルの差異しか認められないと見なしていた。

多起源論自体の由来に関してはルネッサンスまで遡り得ようが、人類学者の間でこの言説が優勢になるのは1820年以降のことである。このことは、19世紀初頭にフランスの自然学者ジュリアン＝ジョゼフ・ヴィレー Julien-Joseph Virey の研究成果が発表されたり³⁸⁾、1840年代にクロード・ベルナール Claude Bernard (1813-1878) が推進した近代医学の進歩によって、人間の生理的均衡は変化しづらくむしろ非常に安定するものだとして理解されたりしたことが背景に存する³⁹⁾。1810-1820年代になると、単一起源論者らが、人類の単一性を主張したビュフォンの言説を相対化せざるを得なくなるほど、多起源論が大きく台頭していた。

時に18世紀以降、以上の論争と平行して、ビュフォンの退化論（原初的人类は白色人種であったが黒色人種へ退化した説）およびラマルクが1809年に出版した『動物哲学』を中心に⁴⁰⁾、生物変移説と生物不変説が対立するもう一つの論争が交わされていた。この二つの論争が必ずしも結びつく必然性はなかったにもかかわらず、生物に関するこの論争が、人種は変化するものか不変のものかという議論へと変化した。さらに概ね、一方において単一起源論が進化論＝生物変移説と重なり（元々同じ「核」から生じた単一人類の間の差異を説明しなければならないため）、他方においては、多起源論は生物不変説と重なっていくのであった。人種を中心とする考察から文化を重視する考察へ研究の重点が移動した20世紀後半になると、人類の単一性を主張した19世紀の進化論＝生物変移説は、ヨーロッパ中心主義的な文化進化論として批判されてしまうのだが、しかし以上見てきた通り、19世紀のパラダイムにおいては単一性に基づいたヒエ

ラルキー的思考は、多起源論と比較すればまだ進歩的であったと言える。

さて、ブロカの「人種の科学」は最終的には、特に 20 世紀において、race という言葉により狭く定義し矮小化させる効果を持ったことは事実なので、我々は異なる時代を解釈するに当たって入念に検討を進めなければならない。19 世紀当時、フェリーのように植民地主義を正当化した政治家ら⁴¹⁾や論者の言説に現れる race という言葉は、必ずしも確定的な意味を持っていたわけではない。従って、上記の二つの論争はむしろ、race の定義について関わるものだったと言えよう。こうした文脈に配慮すれば、単一起源論派の人類学と、多起源論派ないし奴隷制度支持派の人類学とが対立した 19 世紀にあっては、「人種」について語ることが、いくら黒色人種の劣等性を主張したりしていたにせよ、有色人種をヨーロッパ人とは違う「種」であると見なす論者に対して、進歩的な立場だったと思われる。結論から言えば、ブロカは基本的に生物や人種の不変説を支持し、ビュフォンの曖昧な退化論も、ラマルクの適応進化論も、ダーウィンの適者生存進化論も、あらゆる生物変移説を否定していた。前述した通り、ブロカが制度化しようと努めた科学的人類学が（ラマルクやヴィレーと同世代の）エドワードの研究で誕生したものであったが、その理由はエドワードが人種不変説を力説することで科学的人類学が可能になったからに他ならない。1957 年のある科学史事典が、「民族学の起源は 19 世紀の歴史学者らの研究、それにウィリアム・エドワードが 1829 年に〔歴史学者の〕アメデー・ティエリー⁴²⁾に宛てた有名な『人間の種々の生理学上の特徴について』という、人類学の歴史にとって画期的な書簡〔書籍〕に始まる。[...] エドワードがある民族の基本的な特徴が数世紀は経っても、しかも気候の変化や混血にも拘らず、その集団の中に存続するものであると立証した。[...] かくして、歴史的伝統と、言語、技術、習慣、宗教、人体特徴などの変遷に基づいて、人間の諸集団の歴史を辿ろうと探究する民族学が誕生したのである」⁴³⁾と述べるほど、エドワードの重要性を強調する。

そこから、不変説を支持したブロカは、自然とフィラデルフィア学派の業績に強い関心を抱くようになったが、四つの「人種型」が描写されたとされるナイル川の壁画に常に言及し人種不変説を力説したジョサイア・ノット Josiah C. Nott (1804-1873) やジョージ・グリドン George Gliddon (1809-1857) の著作を精読し、相当な影響を受けたのは確実であろう。周知の通り、1857 年に初めて monogenism と polygenism という二つの言葉を使用したのがフィラデルフィア学派である⁴⁴⁾。ヴィレー以降批判も受けながらフランスに広く導入された多起源論を、ブロカは比較的早い時期から支持していた。人類の単一性という仮説、例えばビュフォンの退化論は、いかにして白色人種の夫妻から黒色人種が生じ得るかを全く説明できないと、ブロカは 1858 年の段階ですでに断言している。彼からすれば、変移説とは全くの机上の空論に過ぎず、「単一論者たちが行おうとする説明はあまりにも恣意的であり、彼らの言及した気候による影響はあまりにも取るに足らず、彼らが助けを求めた歴史的仮説はあまりにも奇想天

外な話であるため、どのようにしたら、これほどの世迷い言が科学の中で生まれることができたのか、その御説を拝聴させていただきたいくらいである」⁴⁵⁾と述べるほどだった。1861年になると公然と多起源論を支持し、「複数の発祥の地 (plusieurs foyers de création)」⁴⁶⁾に言及しながら「余は多起源論者である。余は人類が複数の起源を持つと信じている」と発言するようになる。ブロカが人種不変説の支持から、どのような過程でラマルクやダーウィンを批判していったか、さらには、なぜ多起源論を支持するようになったかについては先行研究で詳細に論じられている⁴⁷⁾。様々な単一起源論に対して、多起源論はどうしても人種不変説という前提を必要としていたこと、ならびに唯物論と無神論に傾倒していた19世紀フランスの科学者たち一般が「起源」について論じる行為自体を非常に怪しく捉えていたこと、これらを通じて、ブロカが不変説と多起源論を容易に支持した理由が理解できるだろう。

ところが、初期の近代的な多起源論者ら、特にサミュエル＝ジョージ・モートン Samuel George Morton (1799–1851) や、1850–1860年代のノットとグリドン、フランスではブロカや自然史博物館のジョルジュ・プッシュェ Georges Pouchet (1833–1894) など、数多くの論者が集中的に批判していた言説は、何よりもまずビュフォンの流れを汲む退化論に基づいた単一起源論であった（ビュフォンの退化論によれば、放埒や怠惰に耽った人間は猿へ「逆進化」するという）。ブルーメンバッハ (1752–1840) やブリチャード (1786–1848) と並んで19世紀前半の主要な人類学者であるモートンの理論は、彼の死後、弟子のノットとグリドンによって『人類における人種型』(*Types of Mankind*) (1854年) と『地球の土着人種』(*Indigenous Races of the Earth*) (1857年) でさらに詳述され展開された。この二冊はダーウィンの『種の起原』が刊行される前の、多起源論の最後の集大成と見なすことができる⁴⁸⁾。さらに、ブロカの1858–1860年の有名な「人類という種の複数性の問題との関係で考察された、動物一般の雑種性、特に人類の雑種性に関する研究」で再び詳細に報告された（ただブロカは、新しい論拠を持ち出しておらず、新しい資料データを提出しただけである）。多起源論者らによれば、人間のタイプは不変的なものであり、各タイプの間際に当たる mulâtre、つまり「混血児」⁴⁹⁾ は一種の怪物ではないのだ。mulâtre とは18世紀の奴隷制度支持者らによる造語で、馬とロバの間の雑種であって生殖力のない mulet＝ラバに由来を持つ単語⁵⁰⁾である。また1850年代には、両陣営の論者ともいわゆる「聖書編年」についてもはや対立するのをやめていたが、地球の年齢を恐らく数万年ほどであると判断していた。しかしそれでも、時間こそが変化を起こす張本人だと見なしていたビュフォン以降の単一起源論者らの根本的な論拠を、基本的に不変説を信じる多起源論者らが厳しく攻撃することになる。多起源論者らにとって、もしナイル川の壁画が描かれてから5000年ほど経っても人類のタイプが変化しなければ、5000年を3か4で掛けるとしても、ゼロに等しい数値を足すような全く無意味な行為でしかなかったのである。

以上見てきたように、ダーウィンの1859年に『種の起原』を発表した頃は、1839年創立の

民族学会やヴィレーとドワードの業績、さらにブロカによって制度化された「人種の科学」などを通じて、フランスの科学者らは多起源論の長い伝統に依存していたのである。

ところが同じ時期に、国立自然史博物館人類学講座の主任を代々務めていた、ピエール・フルランス Pierre Flourens (1794-1867)⁵¹⁾、エティエヌ・セール Etienne Serres (1786-1868)、カトルファージュが、フランスで単一起源論の戦線を死守して新しいモデルを提起しようと努めていたのである。しかしながら、前述の通り、カトルファージュのような単一起源論者でさえ、特定の人種（特に黒色人種）が確実に劣等であるという強い信念を持っており、かつ、1861年出版の『人類という種の単一性』(*L'Unité de l'Espèce Humaine*)以降、彼が展開した単一起源モデルが不変論であったということは注目に値する。そこには、科学者でありながら同時にプロテスタント教徒でもあった彼の苦悩が窺えよう。人類という特別な生命体に進化論を適用すること自体を拒否して、カトルファージュが提出した人類後天変化説 (*théorie évolutive humaine*) は、風土が生物を作り変える第一原因であることを強調する仮説であったが⁵²⁾、換言すれば、カトルファージュは多起源論者に対抗しながらも、単一起源論に対しても異議を申し立てたと見なせるだろう。彼のモデルは、フランスとドイツにおいてほぼ同時に提示された、いわゆる「超越論的解剖学」(「反復説」とも呼ばれる) に相当依拠していたのであるが、やや手荒くまとめれば、エルンスト・ヘッケル Ernst Haeckel (1834-1919) の仮説では、胎児の発達過程が人間の進化プロセスの全ての段階を反復するものと見なされ、その一環として、解剖学上観察された体質の特徴が単なる異常現象として扱われるというものであった。つまりヘッケルの考え方は、一定の人体的特徴において、ある人が〈進化の停止〉を見せたり、あるいはある人が〈過剰な進化〉を見せたりするという捉え方であるが、反復説から強い影響を受けつつも進化論や人種変移説そのものを拒否するカトルファージュからすれば、胎児は基本的に白色人種のはずであり、黒色人種と黄色人種とはただ単に未完成な白色人種だということになる。彼の「器官発生的」なモデルは、少なくとも三つのメリットがあっただろう。まず人類内の人体的特徴の差異を、動物界に言及せずに、人類単独の説明だけで解釈できる。次に、このモデルは人間が一種の進化的なプロセスを通じて漸次的に変移してきたという生物変移説を拒否するものである。最後に、風土や食生活あるいは生活スタイルがこうした器官発生的な過程を導くことができると認めれば、各人種との間の差異が、ただ単に〈胎児における異常的現象〉すなわち「種」内の逸脱として扱うことが可能となり、人類という種の単一性が明瞭になるはずである。第三共和政中葉のフランスの自然史家らが多起源論を捨ててより柔軟な言説に鞍替えしていくにも拘らず、カトルファージュだけが、こうして亡くなる 1892 年まで生物不変説を支持したのである。

カトルファージュとは異なる立場でも、ブロカの理論も同様に複雑な前提を有しており、(奴隷制度を支持した) アメリカ学派とは違って、ブロカの多起源論と生物不変説はまず、宗教

やイデオロギーまたは政治性を浴びた教義などを拒否した態度と、次に客観的と見なされた体質上の解剖学的データの研究するには人種不変説（＝安定性）が必要だったことによるものであった。共和政を支持したブロカは概ね、社会が神学的段階から形而上学的段階へ、最後に実証的段階へ移動するというコントの三段階の法則に与しており、その結果、「神学的支配」に対して立証可能な事実を重視すべきだと考えた。彼は例えば、1859年にチャールズ・ライエル Charles Lyell (1797-1875) の推測⁵³⁾を立証したブッシュ・ド・ペルト Boucher de Perthes (1788-1868) による先史時代の発見と人類の古さの立証を歓迎してこの発表を容易に受け入れた。先史時代が有する非常に長い期間が、アメリカ学派の主張する5000年間を相対化してしまい、最終的にブロカにまで疑いを持たせた。非常に長い期間をもってすれば、人種型は変わり得るのではないかと。当惑したブロカは1860年代末頃、5000年という期間を3か4で掛けるのではなく、もし10で掛けるとすれば、生物不変説と生物変移説の両立場が相容れるようになると、判断を避けつつもそのように考えるようになった⁵⁴⁾。

とはいえ、1860-1870年代の彼の研究を見れば理解できるように、彼の不変説的な前提は、弱まったもののそこにとどまっていた。1859年のペルトによる発表の後に1860年代に相次いだ（人骨を中心とした）古生物学的・先史研究的な発見は、人類が進化するという仮説を立証するどころか、むしろ古えのヨーロッパにおける人種的多様性（つまり数多くの人種が併存していたこと）を証明するものに他ならず、これはやはり、単一起源論にとって厳しい資料だとブロカは考えた。しかも、ヨーロッパの土地に住んでいた先住民らが、原史時代（Protohistory）にコーカサス系の優秀な人種によって駆逐された結果全滅したのは、人種学上は劣等であり、かつ現在のヨーロッパ人とは異なる人種型に属していた人々だったからであると、ブロカは結論づけた⁵⁵⁾。多起源論者でありながら不変説の支持者でもあり、さらに猛烈な無神論者であったブロカにとっては、コントと同様、人類の「神学的段階」に特徴的な空論に対し強い疑念を抱いていて、人種変移説や単一起源論のような「決定的な研究が絶対に不可能である」課題は、実にそうした「神学的段階」の空論の類いに属するものでしかなかった。ブロカにとって、ダーウィンの1859年の著作はタイトルだけでも、やはり非科学的な書物の範疇に入るものだったのである。なぜならば、起源を探る行為自体が「科学に属さない」からである。ところが、1865年になると、ブロカは著しく急変した。ダーウィンの業績はもはや蔑視されず、『種の起原』がラマルク著『動物哲学』と並んで、大胆な総合とまで形容されていく。こうした急変の裏に、たった6年間でパリ人類学会の多くの会員がダーウィンの進化論を支持するようになったという状況が、ブロカに危機感を与えていたという事情がある。この延長線上で、1871年に『人間の由来』が出版された時に、ブロカは生物変移説を「認める」ようになるのだが、そこには不可思議な逆説がある。1870年代のブロカは、生物変移説に説得力があるのは生物不変説の側の説得力の弱さによるものだと見なす。すなわち今度は、人種型の安定性（不変さ）

を立証できない生物不変説こそ、神学的・超自然的な仮説の類いに属する言説として扱われていくのである。同時に、進化論を認めながらも認めていないように、ブロカは、ダーウィンの業績の細部については批判してやまず、最後まで両義的な立場を取っていた。ブロカ死後の内的研究史は、なおも彼に忠実な態度を取り、ダーウィンとブロカを同等扱いしながらも、ダーウィンの理論を偏狭なものであるとしたのに対し、ブロカこそが総合を可能にした研究者であると、1909年の時点においてなお断言していたのである⁵⁶⁾。

それから、フィラデルフィア学派の奴隷制度支持という前提を共有しなかったブロカは、社会を研究するに当たって「政治的偏見」を持つ民族学を批判した。もちろん周知の通り人種不平等論を持論としていたとはいえ、実は人道主義的な面も持ち合わせていた。というのも、ダーウィン系の人種変移説や生存競争論といった思考の中に、ブロカが当時目の当たりにしていた植民地戦争という悲劇を癒す安楽剤を見いだせずにいたからである。彼は原住民の習慣温存や「野蛮人」の生活スタイルの尊重を主張して、1870年代中葉、人間による人間の支配を強く批判する論文を何本も起稿し、ある意味で民族自決を支持していたように見える。ブロカは、「起源における相違は、ある人種に他の人種が服従しなければならないという考えを全く含意しない」⁵⁷⁾と説明し、「未開」民族に対して犯された犯罪、ならびに植民地主義やアメリカでの奴隷制度などの様々な弁明に対し厳しく糾弾していた。また同じ路線で、ダーウィンとは違って、やはり昔から公衆衛生を重視する干涉主義的な立場から、ブロカは、文明の進歩を漸次的な淘汰をもって説明することはできないと考えた。ギュスタヴ・ル・ボン Gustave Le Bon (1841-1931)⁵⁸⁾のような人種主義イデオログらとは異なり、1870年代のブロカは「自然」や「本質」に属すると見なされた不平等を、本当は文化や社会における格差による結果であると捉えたのである。結局、ブロカは進歩派だったのだろうか。教育や知識の役割を強調することによって「人種 [= 国民の衛生状態] の改善を図るのと同時に、自然淘汰といった短絡的な改良方法に対抗しなければならない」⁵⁹⁾と発言し、人類を熟知する学問＝人類学が担うべき社会的責任を常に強調していたブロカは、以上見てきた通り生物変移説を支持してはいなかったが、しかし同時に生物変移説を支持せざるを得なかったとも言えるだろう⁶⁰⁾。

結びに代えて

以上、ブロカは実証主義的かつ無神論的な前提に立っており、こうした前提に基づいて、彼がいかに己の「人種の科学」を確立し、その学問の中立性を主張していたかを概観してきた。その上、19世紀という近代化の文脈において、なぜブロカが人種変移説を否定して多起源論を支持したかを見てきた。それにしても、彼の没後、19世紀に形成された形質人類学そのものは、どこまで継承されていったのだろうか。「フランスにおける形質人類学の制度化」⁶¹⁾を

検討した論文では、古生物学者のジャン＝ピエール・ボッケ＝アッペル Jean-Pierre Boquet-Appel が、20 世紀初頭のフランツ・ボアズ (1858-1942) による移民研究 (1907-1910 年) の成果に反して、フランスの形質人類学が異常なほど安定していたことを強調している。ボッケ＝アッペルによれば、この不活発さの原因はフランスの形質人類学が確固たる制度化（学会・学部等々）で保護されていたからである。というのも、フランスの形質人類学に対する批判は、実は非常に早い段階から始まっており、形質人類学の実践とほぼ同じ時期に行われたのである。1880 年にブロカが逝去するやいなや、彼の弟子らが疑いを抱くようになる。四半世紀にわたって蓄積された業績が、果たして何を立証したのだろう、と。人体測定学そのものが誤ったアプローチだったのではと議論されていく。つまり「人体測定学の危機」⁽⁶²⁾ が勃発してしまうのである。それでも、20 世紀半ば頃のフランス形質人類学の大家であり、当時は人類博物館 Musée de l'Homme の館長をしていたヴァルワ⁽⁶³⁾が、1960 年に雑誌『アントロポロジー』(L'Anthropologie) において改めて人種分類という事業の重要さを訴えた。人類学界において 100 年以上前から人種の分類に対するコンセンサスが存在するとし、蓄積された膨大なデータや業績が重要な意味を持つと強調した⁽⁶⁴⁾。

しかし、1885 年に、ブロカが創設した人類学研究室で彼の後任となったトピナル本人でさえ、現在でも評判の高い『人類学概論』(Éléments d'anthropologie générale) という著作において人種不変説を疑問視し、次いで 1891 年には公然と race あるいはタイプといった概念そのものを批判するようになる。トピナルはこうして 1891 年に出版された『自然と人類』(L'Homme dans la nature) の中で次のように述べている。

「ブルターニュやオーヴェルニュや [当時フランスの県だった] アルジェリアのどこにでもあるような村を取ってみよう。開けた国や都市ないしは自然な侵略進路の場所であればなおさらである。市場または教会の出口の前に座って、念入りに観察してみたら、やはりどうしたって、そこを通る人々は皆、違うように見える。すなわち金髪の人もいれば、褐色の髪や茶色の髪もあろうし、細長い顔および幅広くて平らな顔もあろうし、背丈の高いあるいは短い人もあろうし、鼻に関してはどの形も確認できるという、つまり何でもあるわけだ。何とか見分けるのには、何度もその場所に来なければなるまい。そうして初めて、人々の 3 分の 2 がやはり、あまりにも混血が進んでいて、全く分類できない体質を持ち合わせていると思うようになるだろう。それに、残りの 3 分の 1 には、2, 3, 4 つの体型があって、その内の 1 つの体型が確かに優勢ではあろうが、でもまた他に、どうしたらよいかわからないくらい強い印象を与えてくる特徴的な事例も出てくる。それで、以上の状態は、ヨーロッパ、アジア、アフリカのどこへ行っても同じことなのだ。人類とは個人レベルの変化でしか考えることが出来ないものらしい。」⁽⁶⁵⁾

トピナールにとっては、「人類という種において、人種は存在しない。[...] これ [race] は、触れることのできる生の事実ではなく、我々の想像上の産物である」^[66] と、もはや結論が明瞭であった。ブロカの持論だった多起源論や人種・生物不変説も、結局 19 世紀末にはすでに、一方において単一起源説の勝利に終わり、もう一方において形質人類学や「人種」という観念そのものへの批判がなされ始めていた。1960 年代に入ると大学や研究所での講座を失うやいなや、なぜ形質人類学が急速に衰退していったのかを、ブロカの時代から続く批判こそが説明できると考えられる。「人類学を受肉した人」ポール・ブロカの没後すぐに人体測定学に対する批判が始まり、かつ生物不変説が広く疑問視され始めたからである。とはいっても、トピナールやヴァルワに至るまでの形質人類学者らは、ブロカと同様に、必ず科学的な視点から人種の不在あるいは存在を主張しており、いずれの場合でもひたすら「非政治的な科学」を標榜してきた。ブロカが、各人種間のヒエラルキーを論じながらも、自分の「人種の科学」の政治性を拒否したり実際に行われた植民地支配を批判したりしていたように、20 世紀の形質人類学者らも「人種の研究」と「人種の偏見」とを区別する研究者が多い。しかし果たして、トピナールの言うように、もし「人種」が想像上の存在でしかないのなら、こうした範疇を創造した学問まで疑問視せずに、ただ単に研究対象を変えるだけで「民族研究」を続けられるものだろうか。問題となるのはむしろ、他者を対象とした学問が、「客観的現実」を研究すると僭称しつつ、実は他者に対してどのような言説を生産し、かつどのような「現実」を生産しているか、という営みの方であろう。ブロカも 18 世紀の民族学を否定したように、あるいは現在の人類学者らが 19 世紀の形質人類学を否定しているように、科学とは先人らの「誤った研究」を排除し、常に科学の規範的な定義を提示する傾向が強いが、しかし序文で述べたように、「科学」とは歴史上、その時代に国家＝制度ないし社会によって「科学」として認められた領域の活動全般である。そのため、ブロカの「中立性」論は、完璧に科学者による自己定義のための言説ではある。19 世紀半ばから 20 世紀半ばに至るフランスにおいて、形質人類学がそれほどまでに安定し、批判にも拘らず科学として認められていた背景には、やはり国家や制度ないし社会による承認があったからに他ならない。換言すれば、ブロカらの作業の政治性が認められるのには、ほぼ 100 年間にもわたった批判と、1940-1960 年代の脱植民地化と植民地戦争が必要だったのであり、その結果、現在になってようやく、人体測定学を先入観の合理化という営みに過ぎなかったものとして理解するようになったのである。

注

- 1) 本稿は、2007 年 1 月 12 日に行った「人類の表象をめぐる総合研究会」（京都大学人文科学研究所・竹沢泰子代表）における口頭発表を若干修正したものである。

- 2) 19世紀にわたって、旧制度由来の王権以外の正統性を通じてフランスを再考しようと試みられた時、フランス人を「ガリア人種」として捉える歴史学派が現れて、1830年以降の七月王政下で優勢となった。国民＝人種という言説が19世紀の新しい科学医学を通じて強化されていくが、その結果、第三共和政は一方において、大革命という正統性を持ちながらも、もう一方においては「ガリア起源」神話という正統性も持っていた。
- 3) この表現はブロカの葬式の時に使用されたものである。C・ブランケルトより引用。C. Blanckaert, «L'anthropologie personnifiée” Paul Broca et la biologie du genre humain», préface à la réédition de *Mémoires d'anthropologie* [1888], Paris, Jean-Michel Laplace, 1989.
- 4) この区別やフランスにおける歴史学の趨勢については、拙稿「エッセー・レビュー 坂野徹著『帝国日本と人類学者』」『化学史研究』34巻120号、2007年、160-164頁を参照。
- 5) このとき、ユネスコの依頼でレヴィ＝ストロースが執筆したのが『人種と歴史』である。C・レヴィ＝ストロース『人種と歴史』荒川幾男訳、みすず書房、1970年。
- 6) Jacques Mercier, *Histoire de l'anthropologie*, Paris, PUF, 1966.
- 7) 例えば、Jacques Ruffié, *De la biologie à la culture*, Paris, Flammarion, 1983, 2 vol (ジャック・リュフィエ『生物学から文化へ』みすず書房、1984-1986年、全3巻)。アメリカでは、George W. Stocking Jr., *Race, Culture and Evolution* [1968], Chicago, University of Chicago Press, 1972が、こうした人類学による形質人類学批判の好例であろう。
- 8) Michel Izard et Pierre Bonté, *Dictionnaire de l'ethnologie et de l'anthropologie* [1991], Paris, PUF, «Quadrige», 2000; Gérald Gaillard (dir.), *Dictionnaire des Anthropologues*, Armand Collin, Paris, 1997.
- 9) Gérald Gaillard, *The Routledge dictionary of anthropologists*, translated by Peter J. Bowman, London, Routledge, 2004.
- 10) B・アンダーソン『想像の共同体』白石隆・白石さや共訳、増補版、NTT出版、1997年（原版は1983年）；E・ホブズボーム/T・レンジャー『創られた伝統』前川啓治・尾原景昭他訳、紀伊国屋書店、1992年（原版は1983年）。
- 11) レオン・ボリアコフ『アーリア神話——ヨーロッパにおける人種主義と民族主義の源泉』アーリア主義研究会訳、法政大学出版局、1985年（原版は1971年）、特に第二部第二章。
- 12) ブランケルトの初期研究として例えば、«L'anthropologie personnifiée”...», 1989, *op. cit.*; «L'anthropologie en France, le mot et l'histoire», *Bulletins et mémoires de la Société d'anthropologie*, 1989, vol. 1, n° 3-4, pp. 13-43; «La mesure de l'intelligence. Jeu des forces vitales et réductionnisme cérébral selon les anthropologues français (1860-1880)», *Ludus Vitalis. Revista de filosofia de las ciencias de la vida*, 1994, vol. 2, n°3, pp. 35-68。ブランケルトは1981年に *Monogénisme et polygénisme en France de Buffon à Paul Broca (1749-1880)* 『ビュフォンからブロカに至るフランスにおける多起源論と単一起源論 (1749-1880年)』という博士論文で研究を始め、2006年にビュフォンの『人間誌』(*De L'Homme*) を再版するなどしている。
- 13) P・トルは周知の通りダーウィンの専門家ではあるが、18-19世紀の「分類的思考」を細かく検討し、彼が編集した Patrick Tort (dir.), *Dictionnaire du Darwinisme et de l'Évolution*, 3 vol., Paris, PUF, 1996 では数多くの形質人類学者が扱われている。アフェルガンは、『エクゾチズムと他者性』が代表的な著作である。Francis Affergan, *Exotisme et Allérité*, Paris, PUF,

1991.

- 14) スティーヴン・J・グールド『人間の測りまちがい』鈴木善次・森脇靖子共訳，増補改訂版，河出書房新社，1998年（原版は1981年）。
- 15) 例えば，Marc-Antoine Kaeser, *L'Univers du préhistorien: science, foi et politique dans l'œuvre et la vie d'Edouard Desor*, Paris, L'Harmattan, 2004; Carole Reynaud-Paligot, *La République raciale*, Paris, PUF, 2006。
- 16) C. Blanckaert (dir.), *Les politiques de l'anthropologie: discours et pratiques en France (1860-1940)*, Paris, L'Harmattan, 2001.
- 17) 渡辺公三『司法的同一性の誕生』言叢社，2003年。
- 18) 明治期の東京人類学会については，拙稿「明治期の人類学におけるアイヌの捉え方と日本国民観（1884-1906）」『生物学史研究』72号，2003年，73-95頁；坂野徹『帝国日本と人類学者』勁草書房，2005年。
- 19) C. Blanckaert, «L'anthropologie personnifiée"...», 1989, *op. cit.*, p. iii; G. Gaillard (dir.), *Dictionnaire des Anthropologues*, 1997, *op. cit.*; C. Blanckaert, «L'anthropologie en France...», 1989, *art. cit.*
- 20) C. Blanckaert, «L'anthropologie personnifiée"...», 1989, *op. cit.*
- 21) ルイー＝アドルフ・ベルティヨン Louis-Adolphe Bertillon は犯罪人類学を創立したアルフォンス・ベルティヨン Alphonse Bertillon (1853-1914) の父であり，ブロカとともにパリ人類学会の発起人の一人である。
- 22) P. Broca, «Histoire des progrès des études anthropologiques depuis la fondation de la Société» [1869], *Mémoires d'Anthropologie*, Paris, Reinwald, t. II, 1874; C. Blanckaert, «L'anthropologie personnifiée"...», 1989, *op. cit.*, p. vii.
- 23) グールド『人間の測りまちがい』前掲書，第2章「人種多起源論と頭蓋計測学」と第3章「頭の測定」。
- 24) C. Blanckaert (dir.), *Les politiques de l'anthropologie*, 2001, *op. cit.*, p. 97.
- 25) Pierre-André Taguieff, *La Force du préjugé*, Paris, Gallimard, 1987.
- 26) この点については，結びにおいて後述する。
- 27) C. Blanckaert (dir.), *Les politiques de l'anthropologie*, 2001, *op. cit.*, p. 99.
- 28) アメリカの歴史学者ヘシュト Jennifer Hecht は，フランスにおける人類学と無神論との関係を検討している。Jennifer Hecht, *Anthropological utopias and republican morality*, Ph. D., N. Y., Université de Columbia, 1995; *The End of the Soul: Scientific Modernity, Atheism and Anthropology in France*, N. Y., Univ. of Columbia Press, 2005.
- 29) C. Blanckaert, «L'anthropologie personnifiée"...», 1989, *op. cit.*; *Les politiques de l'anthropologie*, 2001, *op. cit.*; J. Hecht, *Anthropological utopias and republican morality*, 1995, *op. cit.*; *The End of the Soul: Scientific Modernity, Atheism and Anthropology in France*, 2005, *op. cit.* フランスで注目されたもので次の論文もある。Elizabeth Williams, *The Science of Man: Anthropological thought and institutions in nineteenth-century France*, Ph. D. Thesis, University of Indiana, 1983.
- 30) C. Blanckaert, «L'anthropologie personnifiée"...», 1989, *op. cit.*, p. v.
- 31) J. Mercier, *Histoire de l'anthropologie*, 1966, *op. cit.*
- 32) 特に，Williams Edwards, *Des caractères physiologiques des Races Humaines considérées*

- dans leurs rapports avec l'Histoire. Lettre à M. Amédée Thierry, Paris, Compère le Jeune, 1829.
- 33) P. Broca, «Histoire des progrès des études anthropologiques depuis la fondation de la Société», dans *Mémoires d'Anthropologie*, Paris, Reinwald, t. II, cité par Blanckaert, 2001, *op. cit.*, p. 100.
- 34) *Idem.*
- 35) Pierre Chaline et als., *La France au XIX^e siècle, 1814-1914*, Paris, PUF, 1995.
- 36) Laurent Heyberger, *Santé et développement économique en France au XIX^e siècle : Essai d'histoire anthropométrique*, Paris, L'Harmattan, 2003 ; C. Blanckaert (dir.), *Les politiques de l'anthropologie*, 2001, *op. cit.*
- 37) W. Edwards, «Esquisse de l'état actuel de l'anthropologie ou de l'histoire naturelle de l'homme», *Mémoires de la Société ethnologique*, 1841, t. I, p. 141.
- 38) Voir C. Blanckaert et Claude Bénichou (dir.), *Julien-Joseph Virey : naturaliste et anthropologue*, Paris, Vrin, 1988.
- 39) ベルナールについては、カンギレム『正常と病理』滝沢武久訳、法政大学出版局、1987年、原版は1943年、改訂版1966年が有名である。
- 40) ラマルクの理論の受容については、Antonello La Vergata, «Néo-Lamarckisme», dans P. Tort (dir.), *Dictionnaire du Darwinisme et de l'Évolution*, 1996, *op. cit.*, pp. 3185-3202を参照。
- 41) 1885年に仏軍がヴェトナムのランソン Langson で一時敗北してしまうと、フェリーは、国民議会を前に、植民地主義を正当化する有名な演説を行い、劣等人種に対するフランスの「文明の使命」について公然と主張したが、ここにある「劣等人種」（races inférieures）はただ単に「後進」という意味しか持たず、本質論的な意味を持たない。
- 42) ティエリー Amédée Thierry (1797-1873) は七月王政期における、フランス国民=ガリア人史観の代表的な歴史学者である。
- 43) Maurice Daumas (dir.), *Histoire de la Science*, Encyclopédie de la Pléiade, Gallimard, 1957, pp. 1341-1343 ; voir aussi Blanckaert, «Monogénisme et polygénisme», dans P. Tort (dir.) *Dictionnaire du Darwinisme et de l'Évolution*, 1996, *op. cit.*, pp. 3021-3037, ici p. 3032.
- 44) C. Blanckaert, «Monogénisme et polygénisme», 1996, *art. cit.*, p. 3021.
- 45) Paul Broca, «Recherches sur l'hybridité animale en général et sur l'hybridité humaine en particulier considérées dans leurs rapports avec la question de la pluralité des espèces humaines», articles de 1858-1860 compilés dans *Mémoires d'Anthropologie*, 1877, *op. cit.*, t. III, p. 370, cité dans Blanckaert, 1989, *op. cit.*, p. x ; «Sur le transformisme», articles de 1858-1860 compilés dans *Mémoires d'Anthropologie*, 1877, *op. cit.*, t. III, cité dans Blanckaert, 1989, *op. cit.*
- 46) P. Broca, «Note sur l'ancienne race égyptienne», *Bulletins de la Société d'Anthropologie de Paris*, 1861, t. II, pp. 552-553, cité dans *ibid.*, p. xxxiii.
- 47) C. Blanckaert, «Monogénisme et polygénisme», 1996, *art. cit.*
- 48) ノットとグリドンの研究については、ゲールド『人間の測りまちがい』前掲書。
- 49) 現在の仏語では混血の人を métis という。
- 50) 18世紀フランスにおける奴隷制度と人種主義思想については、Yves Benot, *La Révolution et*

- la fin des colonies*, Paris, La Découverte, 1987; Florence Gauthier, *Vie et mort du droit naturel en Révolution*, Paris, PUF, 1992 を参照。
- 51) そもそも、フルーランスはキュヴィエ (1769-1832) の弟子であり、ラマルクが後ろ盾をしていた自然史家である。
- 52) C. Blanckaert, «Monogénisme et polygénisme», 1996, *art. cit.*
- 53) ライエルの『地質学原理』(*Principles of Geology*) (初版は 1830 年, 最終版は 1875 年) とその思想変遷, またダーウィンとの関係については, スティーヴン・J・グールド『時間の矢・時間の輪』渡辺政隆訳, 工作舎, 1991 年を参照。
- 54) C. Blanckaert, «“L’anthropologie personnifiée”...», 1989, *op. cit.*; «Monogénisme et polygénisme», 1996, *art. cit.*
- 55) 19 世紀における先史時代人にまつわる言説については, Albert et Jaqueline Ducros (dir.), *L’Homme préhistorique — images et imaginaire*, L’Harmattan, Paris, 2000 を参照。
- 56) Georges Hervé, «Les trois glorieuses de 1859 et leur cinquantenaire», *Revue de l’école d’anthropologie de Paris*, vol. 19, 1909, pp. 1-14.
- 57) P. Broca, «Recherches sur l’hybridité...», *art. cit.*, p. 566.
- 58) 人種論に関するル・ボンの代表作として, 1894 年刊行の『民族発展の心理』(*Lois psychologiques de l’évolution des peuples*) がある (大日本文明協會訳, 1910 年)。
- 59) P. Broca, «Les sélections» [1872], *Mémoires d’anthropologie*, 1877, *op. cit.*, t. III, p. 245.
- 60) C. Blanckaert, «“L’anthropologie personnifiée”...», 1989, *op. cit.*, p. xxxix.
- 61) J.-P. Boquet-Appel, «L’institutionnalisation de l’anthropologie physique en France», *Gradhiva*, no°6, 1989, pp. 23-34; voir aussi Blanckaert, 2001, introduction. ブランケルトは人類学の制度化についてのヴァルワの見解を紹介している。
- 62) C. Blanckaert, «La Crise de l’anthropométrie: des arts anthropotechniques aux dérives militantes (1860-1920)», Blanckaert (dir.), *Les politiques de l’anthropologie*, 2001, *op. cit.*, pp. 95-172.
- 63) ヴァルワについては, P. Tort, «Vallois, Henri Victor», dans P. Tort (dir.) *Dictionnaire du Darwinisme et de l’Évolution*, 1996, *op. cit.*, pp. 4399-4400 を参照。または, ボッケ=アッペルによるヴァルワのインタビューも興味深い。「Interview de Henri Victor Vallois (le 15 février 1981)», *Bulletins et mémoires de la Société d’anthropologie*, nouvelle série, vol. 8, no. 1-2, 1996, pp. 81-103.
- 64) H. V. Vallois, «Vershuer (O. V.): Genetik des Menschen; Lerbuch der Humangenetik», *L’anthropologie*, 1960, pp. 343-344; J.-P. Boquet-Appel, «L’institutionnalisation de l’anthropologie physique en France», 1989, *art. cit.*
- 65) P. Topinard, *L’Homme dans la nature*, 1891, p. 39, cité dans J. P. Boquet-Appel, *art. cit.*
- 66) *Ibid.*, p. 4.